

アート・センター

1 理念・目的

慶應義塾大学アート・センターは、平成5（1993）年に開設された大学附属の研究センターである。慶應義塾の歴史と伝統が培ってきた学芸の土壌と、さまざまな学問領域の成果を総合する立場から、現代社会における諸芸術活動についての理論研究と実践活動とを、開設以来すでに20年に及ぶこの間、鋭意展開し、実践を重ねつつ今日に至っている。

現代社会は、世界規模での各種情報の氾濫に伴い、人間の感性や価値観の変容が著しい時代でもある。そうしたなかで、アート・センターは新時代にふさわしい文化的・芸術的な感性の醸成と、表現活動の可能性の追究とをおもなテーマとしながら、既成の学問研究の限定的な枠組みにこだわることなく、洗練とした未来志向の文化環境の創出に寄与することを主要な目的として、活動を継続している。

アート・センターの基本理念としては、「人間形成」「トランス・アート」「芸術関連情報の収集と提供」「アート・マネジメント」そして「オープン・フォーラム」の、5つがあげられる。まず第1の「人間形成」は、文化的・芸術的感性の醸成と、成熟した社会にふさわしい価値観の創出、そして、ゆとりある人格の形成をめざすものである。その2は「トランス・アート」で、さまざまな領域にまたがる協同活動を展開している現代芸術の動向を踏まえつつ、芸術活動の伝統をも視野に入れておこなわれるトランス（横断的）・アートにおいて、交流や「場」の革新性を究明し、未来にむけた芸術理念の構築を試みるものである。その3「芸術関連情報の収集と提供」では、周辺の関連領域も視野に収めつつ、多角的で豊かな芸術情報の収集と提供を実践するものである。その4は、「アート・マネジメント」であり、芸術活動の共有という社会的な要請を念頭において、その実践のための多様な方法と知識との学術的な開発を目指すものである。最後の「オープン・フォーラム」では、ワークショップ等の場を設けることで、学内外、さらに国内外の関連諸機関や団体、個人と交流しながら、協同プロジェクトなど開かれたフォーラムを通じて研究・教育・実践活動を推進してゆく、というものである。これら5つの理念を踏まえつつ、以下本報告書では具体的に、過去の活動を振りかえりながら点検を加えていきたい。

アート・センターの事業は、以上の思想を踏まえての多岐にわたる活動がその中心となっていることは、いうまでもない。たとえば、アート・センターの各種催事は、そのほとんどが学生に開放され、参加無料を原則としている。また、附属の諸学校生徒を対象としたワークショップなど、一貫教育の場を生かした世代横断的活動を実現するとともに、教職員、卒業生、さらには地域の住民や一般市民に対しても広報し、参加を呼びかけている。

とくに昨年度からは、従来学内に博物館法に基づく常設展示室を備えていなかった慶應義塾では初めての試みとなるアート・スペースが開設されることとなり、その運営をアート・センターが委託されたことによって、過去断続的に学内施設で行ってきた展示活動が恒常化したことは特筆すべき変更点である。アート・スペースは博物館学関連講義をはじめとする教学上に必要不可欠な施設であるのみならず、その性格上、当初から広く一般にも公開されているために、この常設展示室は催事活動の重要な柱として、今後アート・センター活動の中核を成していくものとなるだろう。

このほか、とくにとりあげるべき活動としては、アーカイブの整理・公開活動があげられる。アート・センターでは、すでに芸術関連で四つのアーカイブの公開がおこなわれており、海外を含む研究者や愛好家に利用されているが、昨年度は新たに寄贈された西脇順三郎アーカイブの整理・公開が始まるなど、次第にその活動規模が拡大化の状況にある。諸研究会や設置講座の運営、はたまた刊行物の定期刊行も並行しながらの活動には困難が伴うが、日本ではまだあまり例のないアート・アーカイブ活動に寄せら

れる期待は想像以上に大きく、したがって、もっとも注目されるその活動の継続性についても、現行のスタッフたちの高い使命感によって支えられている状況である。

以上の諸活動のほかにも、公私の各種外部資金導入による研究活動、委託事業などにも積極的に関与することによって、アート・センターはその活動を外向きにも開いていくことで、今後も引き続きワールドワイドな発信を模索していきたいと考えている。

なお、自己点検および評価を行うべき本報告書が、本来学部・大学院のために作られた書式であるため、たとえば教育活動についてはたとえば展示や公演などの催事や講座等を、また研究活動についてはアーカイブ事業や年報等刊行物の刊行等を、それに相当するものとして報告するかたちとなっていることを、最後にお断りしておく。

アート・センターの点検・評価報告書は平成 14 (2002) 年度にそれまでの 4 年間で対象として提出している。その後、平成 23 (2011) 年度末まで 8 年分が今回の報告の対象となる。しかしながら、前回対象の 4 年間に比して、種々の活動が広範かつ活発になったことから、前回と同程度の報告書を作成した場合、期間が長いのみならず、活動量の増加により本報告書が過大に膨れ上がる危惧をも抱いている。以上のようなことから、全体的な概略を示した後、基本的には平成 19 (2007) 年度以降の 5 年間について報告する。また、各項目の詳細に関しては、毎年発行している『慶應義塾大学アート・センター年報』に譲るものとする。

3 教員・教員組織

アート・センターの活動と運営の方針は、それを検討する運営委員会にて協議、決定される。運営委員は、大学各学部の学部長と、所長指名による所員、さらには外部機関の有識者から構成され、年 2 度の開催が実施される。

教育・研究については、当センターに所属する 1 名の専任所員（有期）と、20 名の所員、さらには他大学、研究所、美術館など外部機関所属の 19 名の訪問所員によって担われている。とくに、別記に記される通り、昨今の当センターの業務は多種多様にわたり、各種の業務量も増大の一途をたどっているために、訪問所員を除く専任・兼任所員は日常業務に忙殺される状況が続いている。

ことに、平成 23 (2011) 年度より展示施設である慶應義塾大学アート・スペースの運営を当センターが担うことになり、キュレーターを兼務している専任所員が同スペース主任学芸員を兼務するのみならず、兼任所員のうち学芸員資格を持つ 3 名が同スペースの学芸員を兼務する状況にある。なお、同スペース館長はアート・センター所長の兼務である。

現在、各活動は所員たちによる有形無形の奉仕精神によって支えられているが、学内外においても、当センターの各種活動は継続性を強く求められる状況にあるために、専任所員の待遇の安定化、ひいてはその増員が現場における最も重要な課題となっている。なお、義塾内の諸学校所属の兼任所員をのぞく兼任所員については、その任用について毎年研究業績の報告を各自に義務付けており、その点検・確認を実施している。

4 教育内容・方法・成果

5 学生の受け入れ

6 学生支援

- 7 教育研究等環境
- 8 社会連携・社会貢献
- 10 内部質保障

以上については、下記に研究所としての当センターの活動を踏まえつつ、述べていくことにしたい。

アート・センター活動の概略

アート・センターの各種の活動では、パブリックにオープンな活動として、その研究成果を学生や一般の方々に公開し、文化・芸術的な活動を通じて社会と切り結ぶ側面をもつ事業を「公開的活動」として扱う。一方で、アーカイブ事業や論考等を発表する刊行等を「研究的活動」として扱う。なお、平成19(2007)年度以降、アート・センターの設置講座として「アート・アーカイブ特殊講義」および「アート・アーカイブ特殊講義演習」が設置されており、「設置科目」の項目を設ける。

組織と財政に関する項目で後述するが、アート・センターの大きな特徴でもあるアーカイブ活動は基本的には外部資金によって運用されており、その変遷によって活動も影響を受けている。それはアーカイブ活動に留まらずその活動成果を発表する展覧会や、その他の活動も資金的な側面に大きく影響を受けていることが否めない。大学からの資金で可能な活動範囲が限られる中、いかに外部から資金を獲得して、質の高い活動をしていくかという事が、常にアート・センターの課題となっている。

A. 公開的活動（公演、展示、講座等）

アート・センターでは、発足以来、年次企画として各種の公演や演奏会、講演会を開催してきた。平成16(2004)年度以降についても、所員の提案による年次企画が開催されている。また、平成18(2006)年度以降は毎年、何らかの形で展覧会を開催し、アーカイブ活動の成果発表などの場としてきた。また、港区との協働事業としてのアート・マネジメント講座（ワークショップ・講演会・展覧会・コンサートを複合的に組み合わせたもの）や、日経新聞と共催したルーヴル美術館サマースクールなど、学外との協働事業にも積極的に取り組んだ。

年次企画に関しては、平成16(2004)年から平成20(2008)年までのオープン・リサーチ・センター(ORC)からの助成を受け（「デジタル・アーカイブ・リサーチ・センター」(DARC)として採択）、アーカイブ活動が行われていたために、アート・センターの本体資金により平成15(2003)年度まで同様に4～6本程度の年次企画を行っていた。平成21(2009)年度以降については、資金的な状況から、本体資金で行う催事数を押さえ、外部資金などを獲得した上で行うケースが多くなった。しかしながら、全体の実施数としては、獲得資金の条件などもあり、かえって増加の傾向にある。また、アーカイブのスタッフの活動の広範化を受けて、外部機関との連携など新たな活動の展開も広がっている。総じて以前より活発に活動が展開されていると言えるだろう。

また、平成23(2011)年度より、常設的な展示施設、慶應義塾大学アート・スペースの運営が活動の一環に含まれることとなった。これまでも展示活動をコンスタントに行ってきたが、更に充実した活動が可能となった。また、この施設はアート・センターの付属施設ではなく、慶應義塾大学全体の施設であるため、他研究所や研究グループの展示事業をサポートして、展示を実現する役割も担っている

B. 設置科目

上記 ORC として採択された DARC においては、アーカイブ環境を伴う場でのアーキビスト養成に向けた取り組みを平成 18(2006)年から開始したが、その成果として平成 19(2007)年度より、アート・センターの設置講座として「アート・アーカイブ特殊講義」および「アート・アーカイブ特殊講義演習」が、それぞれ大学院の授業科目として設置された。アート・センターが学部には付属せず、独立していることから、これらはどの研究科からも履修が可能な科目として設置されている。そしてこれらは、アーカイブ構築の実践と、その基盤となるべきアーカイブ論の形成がともに行われる大学付属機関の研究アーカイブの在り方をも具体的に示す、ケーススタディの場となっている。

また、平成 19(2007)年から 3 年にわたり、日本レコード協会より寄付を得て寄付講座「クリエイティブ産業研究」を開講した。コンテンツ・ビジネスへの関心を高め、知的財産を尊重する意識を高めることを目的とする講座で、多彩な招聘講師を迎えて多角的な講義が実施された。この講座も全学部に開かれた講座である点が大きな特徴であった。

C. 研究的活動(アーカイブ活動、刊行等)

アート・センターでは、平成 10(1998)年度より学内外の研究助成を受けて、研究アーカイブの実践的構築作業を進めている。平成 16(2004)年度から 4 年間は第一期 DARC の最終年および第二期 DARC3 年に当たり、その資金をもって、アーカイブ・スタッフの雇用も含めたアーカイブ活動を実践してきた。特にそれまで複数のアーカイブ構築(基本的に土方巽、瀧口修造、ノグチ・ルーム、油井正一の 4 つ)が実践されていたものの、研究利用に公開されていたのは土方巽アーカイブのみであった。だが平成 18(2006)年度より順次、瀧口修造アーカイブ、ノグチ・ルーム・アーカイブと公開が続き、平成 22(2010)年度には新たに油井正一アーカイブも研究利用が可能となった。また、新規の資料体として、平成 22(2010)年には西脇順三郎研究の第一人者新倉俊一氏より西脇順三郎資料の寄贈を受けたのを機に、これの整理を行った結果、平成 24(2012)年 1 月には公開の運びとなった。その他にも、研究寄託の形でいくつかの未整理資料などがもたらされ、戦後芸術研究に関する限りでは、より充実した資料総体を供する場ともなってきた。また、資料保管環境としては、平成 18(2006)年度以降、保管庫の温湿度整備などに務めてきたが、平成 23(2011)年秋のアート・センター移転(西別館から南別館へ)に伴い、より環境が整った保管設備を確保できるようになった。同時に資料閲覧者のスペースも確保され、研究環境は以前にくらべて向上した。

研究者の来訪も以降は非常に活発となり、以前から多くの来訪者を受けている土方アーカイブをはじめ、瀧口アーカイブ、その他でも研究利用、また展覧会への資料貸出も増加している。特に海外研究者の来訪、海外の諸機関との協働などが新しい展開としてあげられる。

なお、アート・センターは研究活動の 1 つとして、慶應義塾が所有する美術品や建造物の調査およびその保存修復に関する助言・指導を行っている。管財部を中心として活動する「慶應義塾美術品管理運用委員会」では、その事務局的な役割も担うという状況にある。

開所以来発行している刊行物として、研究紀要誌『BOOKLET』、機関誌『ARTLET』(年 2 回発行)および年間の活動を総覧する『年報』がある。『BOOKLET』は毎号特集を組み、各号とも担当所員が企画・編集に当たっている。『ARTLET』はアート・センターの活動を紹介しつつ、特集に沿った論考も随時掲載してきた。『年報』は創刊号から自己点検の視野をいれて、アート・センターの全活動を記録すると共に論考や調査報告を掲載し、研究紀要的側面を確保している。またこの他にも、土方巽アーカイブに関する資料集やアーカイブに関するシンポジウムの報告書などを刊行し、アーカイブ活動が研究資料として生かされる形をつくっている。平成 18(2006)年度以降は催事の際には必ず A5 版のリーフレットを

作成し、参加者への手引きとするとともに記録化を継続している。

なお、アート・スペースの開設以降、各回の展示に伴って学術的な論考や作品解説を掲載したリーフレットを必ず刊行、無料にて配布している。

さらに所員が主催する各種研究会活動があり、芸術・文化に関する研究やプロジェクトが展開中である。

アート・センターの活動・研究実績（平成 19〔2007〕年度以降）

A. 公開的活動（公演、展示、講座等）

【平成 19（2007）年度】

公演：ジャズコンサート 油井正一没後 10 年アспект・オブ・ジャズ 2007 佐藤允彦と仲間たち / 展示：没後 25 年記念展「西脇順三郎と美術」 / 展示：アート・アーカイヴ資料展 II「1978」 / 講座：ルーヴル美術館・サマースクール in Japan（一般公開セッション+ワークショップ、共催：ルーヴル美術館・日本経済新聞社） / 講座：ワークショップ Artist in Campus 大竹伸朗「スクラップ」 / プロジェクト：港区との共同事業「アート・マネジメント講座 2007」（入門講座、公開講座[3回]、ワークショップ、展覧会）

【平成 20（2008）年度】

公演：新入生歓迎行事 室伏鴻公演「quick silver/ HIYOSHI version」 / 展示：アート・アーカイヴ資料展 III「1968 肉体の叛乱とその時代」 / 展示：慶應義塾創立 150 年記念「ユーザーの領分 版画・写真・マルチプル作品の過去・現在」展 / シンポジウム：DARC 活動報告会「デジタル・アーカイヴその現在と未来」 / プロジェクト：港区との共同事業「アート・マネジメント講座 2008」（入門講座、公開講座[3回]、ワークショップ、コンサート、展覧会） / インスタレーション+映像伝送：「命の実感プログラム 土の土方像と水滴の時間」（協力事業） / 会議：国際舞踏カンファレンス（運営協力 DMC 機構プロジェクトポートフォリオ BOTOH 主催）

【平成 21（2009）年度】

ワーク・イン・プログレス「磁場、あるいは宇宙的郷愁」 / シンポジウム：「映像人類学とアート」人類学的表現の新地平を求めて 映像とアートが紡ぐ記録と表現の新たな関係（共催：慶應義塾大学 GCOE「論理と感性の先端的教育拠点形成」哲学・文化人類学班） / 公演：東京文化発信プロジェクト 学生とアーティストによるアート交流プログラム「土方巽『病める舞姫』を秋田弁で朗読する 米山九日生少年に捧ぐ」 / 上映：土方巽舞踏台解剖 IV「《痲瘡譚》土方巽最高傑作 全編上映」 / 展示：谷口吉郎とノグチ・ルーム（共催：三田哲学会） / 展示：草月アートセンター 印刷物という「半影」（平成 21 年度港区文化振興基金助成事業） / シンポジウム：キックオフ・シンポジウム 対話型アーカイヴの可能性（人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業 芸術創造資源のための対話型アーカイヴ構築推進プログラム） / 講演：大学の建築フォーラム（同前） / 講演：新しいアーカイヴ学のために アート・アーカイヴ実践の現場から（同前） / プロジェクト：港区との共同事業「アート・マネジメント講座 2009」（公開講座[3回]、ワークショップ、コンサート、展覧会） / 上映協力：土方巽舞踏台解剖 IV「《痲瘡譚》土方巽最高傑作 全編上映」（DMC 機構プロジェクトポートフォリオ BOTOH 主催） / 展覧会協力：慶應義塾をめぐるとの芸術家たち 慶應義塾創立 150 年記念関連企画展（国立国際美術館） / 展覧会協力：特別展「慶應義塾創立 150 年記念 夢と記憶の江戸 高橋誠一郎浮世絵コレクション名

品展」(三井記念美術館) / 事業協力: A REVOLTA DA CARNE: DIALOGOS BRASIL- JAPAO 展及び関連セミナー(ブラジル、サンパウロ、SESC Consolacao, Teatro SESC Anchieta)

【平成 22 (2010) 年度】

展示: アート・アーカイヴ資料展 V 「アーカイヴの現場」 / シンポジウム: アート・アーカイヴ 多面体: その現状と未来(アート・ドキュメンテーション学会年次大会) / 公演: 詩と舞踏のセッション「21 世紀の ULTRASMART 閃光のスフィア レクイム」 / 講演: 拡張するジャズ 油井正一アーカイヴ開室によせて / プロジェクト: 港区との共同事業「アート・マネジメント講座 2010」(公開講座[3 回]、ワークショップ、コンサート、展覧会) / 講演協力: 土方巽舞踏台解剖 V 「細江英公 写真と舞踏を語る」(DMC 機構プロジェクトポートフォリオ BOTOH 主催) / シンポジウム: アート・アーカイヴ I 継承と活用、アート・アーカイヴの「ある」ところ(共催: アート・ドキュメンテーション学会、東京パブリッシングハウス、TEZEN) / シンポジウム: 「なにかいってくれ いまさがす」(平成 21 年度港区文化振興基金助成事業)

【平成 23 (2011) 年度】

講座: ワークショップとシンポジウム「ウィリアム・フォーサイス x 土方巽 身体のインスタレーション」 / シンポジウム: アート・アーカイヴ II、プラットフォームの形成に向けて(共催: アート・アーカイヴ・プロジェクト) / 講座: 湯浅譲二ワークショップ 全 2 回 / 講演協力: 土方巽舞踏台解剖 VI 「NAKANOSHIMA」(DMC 機構プロジェクトポートフォリオ BOTOH 主催) / 上演: カルロ・ゴルドーニ 世界の大劇場ヴェネツィア / 公演: 拡張するジャズ LIVE Vol.1 神保彰 x 林正樹 / 展示: 記憶の南校舎 / 展示: センチュリー文化財団寄託品展覧会「日本の写経」(共催: 斯道文庫) / 展示: 東西の絵入り本 1400 1700 年 I 「絵入り本の比較研究に向けて」(共催: 慶應義塾大学絵入り本プロジェクト)

B. 設置科目

【平成 19 (2007) 年度 ~】

アート・センターの設置講座「アート・アーカイヴ特殊講義」および「アート・アーカイヴ特殊講義演習」(大学院生対象)を開講。秋学期の演習はアート・センターのアーカイヴを授業の場として学ぶ講座となっている。受講者数は年によってばらつきがあるものの、アーカイヴ的な思考を学び、またアーカイヴが実践的に行われている場において学ぶ、他所では提供し難い講座となっている。

【平成 19 (2007) ~平成 21 (2009) 年度】

社団法人日本レコード協会寄付講座「クリエイティブ産業研究 I・II」を開講。各年とも講義は木曜日 5 時限(16:30-18:00)に開講。担当の美山良夫に加え、平成 19 (2007) 年度 24 名、平成 20 (2008) 年度 23 名、平成 21 (2009) 年度 23 名の講師を招聘し、ヴァリエティーに富んだ講義が行われた。また、履修生以外にも門戸を開くために、公開講座を行った。

C. 研究的活動(アーカイヴ活動、刊行等)

C-1. アーカイヴ活動

アート・センターにおいてアーカイヴ活動の比重は近年、特に大きくなってきている。

各資料体を総合した全体的活動としては、ウェブサイトやデータ・ベースの試作、データ公開の促進など、デジタル的な側面でのアーカイヴ全体での公開促進に積極的に取り組んだ。ハード面では、通常執務室とは別にサーバー室を設置した。資料保管庫はその環境改善に取り組み、西別館収蔵庫を温湿度管理ができる環境としたが、平成 23 (2011) 年秋にはアート・センターが南別館に移転したのに伴い、

保管庫環境が一層整えられ、保管庫のスペースも拡張した。それによって、資料保管だけでなく、温・室温管理がなされた区域において資料の研究閲覧の場所を設けることができた。

以下、各資料体の活動について略述するが、通常の活動として、日々の資料の整理・整備、アーカイブ構築、研究閲覧者への対応はいずれの資料体においても行われている。

【土方巽アーカイブ】

「動きのアーカイブ」に関わる活動。各種上映。海外での展示・上映への協力（国際交流基金主催事業に協力した「舞踏 大いなる魂」（ロシア、中国）など）、資料貸出（海外を含む）、アーカイブ資料展覧会の実施。関連研究会「土方巽を語る会」の実施。大阪万博みどり館上映映像『誕生』調査（平成 23〔2011〕年度万博資金助成）、デジタル資料集『Data Map for Corpus of Documents』など、資料集等の制作刊行。

【瀧口修造アーカイブ】

1958年の旅に関わる書籍刊行のため準備（平成 21〔2009〕年刊行）、書簡等について他のアーカイブ・モデルとなるような整理構築を行い、研究利用への提供を促進。展覧会への調査協力・資料貸出（千葉市美術館「瀧口修造とマルセル・デュシャン」2010 など）、他の瀧口資料を所有する機関（富山県立近代美術館・多摩美術大学図書館）との共同研究会。科学研究費による研究調査、展覧会準備。

【ノグチ・ルーム・アーカイブ】

ノグチ・ルームに関する資料の充実。ノグチ・ルームの調査修復活動。建築に関わるアーカイブであることから、ブランチとして「慶應義塾の建築」プロジェクト（平成 20〔2008〕年度～）を展開（2008年度文化庁受託事業「デジタル・アーカイブ 慶應義塾の建築」他による）、日吉寄宿舍の改修委員会にも建築アーカイブを展開する立場から参加。関連展示の実施。

【油井正一アーカイブ】

資料の初期整理を完了し、研究公開を開始（平成 22〔2010〕年度）、関連催事の実施。関連研究会の開催。公開したことによる新規資料の受入。

【西脇順三郎アーカイブ】

資料整理と目録化。開設記念展覧会の開催。関連研究会の開催。

【その他の資料】

上記、アート・センターが所管・公開している資料体の他に幾つかの資料体について、研究活動が行われている。アート・センター創設期に寄贈された雑誌『役者』関連の資料「田辺コレクション」や研究寄託を受けている草月アートセンター関連資料など、様々な経緯でアート・センターにもたらされた資料が存在する。それぞれの状況に即して対応しつつ、戦後芸術のアーカイブを展開する研究所として、資料が研究に有効に生かされる道を見出せるように取り組んでいる。

C-2. 慶應義塾所蔵作品調査・保存活動

アート・センターでは、依頼により慶應義塾所蔵の美術作品を調査し、かつまたその保存・修復にもたずさわってきている。毎年、予算の範囲で保存修復活動を行っているが、過去5年間ではとくに、ノグチ・ルームに関する修復活動を集中的に行った。また、これと並行して、新たに作品管理データベースの構築にも取り組んでいる。その他、平成 21（2009）年度には創立 150 年記念関連の展覧会にも協力しているが、全般に塾内作品の外部展覧会への貸出の際には、事前にその状態調査を行い、貸出の立ち会いを含め、適正な作品貸出が行われるように逐次協力している。以下に過去5年間の修復作品を列挙する。

【平成 19 (2007) 年度】

ノグチ・ルーム関連：イサム・ノグチ《茶托》、《丸椅子 (A-D)》(4 脚)、《腰掛(小)》、《腰掛(大)》、《テーブル》、藤製敷物、床 三田キャンパス野外彫刻洗浄保存処置：朝倉文夫《平和来》、朝倉文夫《小山内薫胸像》、柴田佳石《福澤諭吉胸像》

【平成 20 (2008) 年度】

菊池一雄《青年》再設置 吉田三郎《平沼亮三胸像》洗浄保存処置・移設 山名常人《福澤諭吉胸像》(日吉キャンパス) 朝倉文夫《藤山雷太胸像》 大熊氏廣《福澤諭吉像》
大熊氏廣《燈台》 峰孝《牧童》

【平成 21 (2009) 年度】

長谷川栄作《引接》 猪熊弦一郎《デモクラシー》 三田キャンパス野外彫刻洗浄保存処置：朝倉文夫《平和来》、朝倉文夫《小山内薫胸像》、柴田佳石《福澤諭吉胸像》、菊池一雄《青年》

【平成 22 (2010) 年度】

椿貞夫《富士山(河口湖)》(幼稚舎蔵) 高島野十郎《海の風景》 山名常人《福澤諭吉胸像》(湘南藤沢キャンパス) 清川泰次《白の世界 No.60》《白の世界 No.62》

【平成 23 (2011) 年度】

監局屋上鐘 井上公三《花》

C-3. 刊行物

アート・センターのおもな刊行物を、以下に掲げる。

『BOOKLET』は特集双書形式をとるため、特集によらない自由なテーマの論考が掲載される。特にアーカイヴ関連の論考は毎年必ず執筆されている。『年報』は研究紀要的な側面をも併せもち、各号に論考が掲載されている。『ARTLET』は従来通り各号特集を組んで編集が行われ、1年に2号ずつ刊行された。

【BOOKLET】

平成 19 (2007) 年度 16号『ワークショップのいま 近代性の組み替えにむけて』論考9篇収録。
平成 20 (2008) 年度 17号『福澤諭吉と近代美術』論考9篇収録。
平成 21 (2009) 年度 18号『文化観光 「観光」のリマスタリング』論考6篇収録。
平成 22 (2010) 年度 19号『視×触 視ること、触れること、感じること』論考6篇収録。
平成 23 (2011) 年度 20号『ゴジラとアトム 原子力は「光の国」を見たか』論考6篇収録。

【年報、ARTLET】

『年報』は以下、論考の本数のみ附記する。

『年報 15号 2007/08』論考3篇収録。

『年報 16号 2008/09』論考3篇収録。

『年報 17号 2009/10』論考2篇収録。

『年報 18号 2010/11』論考3篇収録。

『ARTLET』は各号の特集名を掲げる。

平成 19 (2007) 年度 28号「検索というポリティクス」、29号「波(ウェイブ)」

平成 20 (2008) 年度 30号「大学にとって研究所とは」、31号「絶叫/爆音」

平成 21 (2009) 年度 32 号「botanical garden 神と魔女が会おう園」、33 号「東京タワーとスカイツリー」

平成 22 (2010) 年度 34 号「建築と記憶・歴史」、35 号「『テレビの時代』の終焉」

平成 23 (2011) 年度 36 号「東北と芸術」、37 号「西脇順三郎」

【その他の刊行物】

定期刊行物の他に資料集や記録集などを随時刊行し、研究成果の発信の機会とするとともに、活動の記録化や、資料の研究利用への公開の意味をも持たせている。

『肉体の叛乱 舞踏 1968 / 存在のセミオロジー』発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 21 年(2009) 年 3 月 31 日

『デジタルアーカイヴ その継承と展開』(慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター報告書 2006-2009) 発行：慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター、平成 21 (2009) 年 3 月 31 日

『港区委託事業 アート・マネジメント講座(実践講座(2006)/2007/2008) 事業報告書』編集・発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 21 (2009) 年 3 月

『慶應義塾大学アート・センター ケース教材 1 アルテピアツァ美唄』編集・発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 21 (2009) 年 4 月

『慶應義塾大学アート・センター ケース教材 2 能登演劇堂』編集・発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 21 (2009) 年 4 月

『慶應義塾大学アート・センター ケース教材 3 富士ゼロックス版画コレクション』編集・発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 21 (2009) 年 4 月

『瀧口修造 1958 旅する眼差し』編集：慶應義塾大学アート・センター、発行：慶應大学出版会、平成 21 (2009) 年 10 月 31 日

『平成 21 年度文部科学省人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業 芸術創造資源のための対話型アーカイヴ構築推進プログラム [報告書]』発行：芸術創造資源のための対話型アーカイヴ構築推進プログラム(慶應義塾大学アート・センター) 平成 22 (2010) 年 3 月 31 日

『平成 21 年度文部科学省人文学及び社会科学における共同研究拠点の整備の推進事業 芸術創造資源のための対話型アーカイヴ構築推進プログラム キックオフ・シンポジウム 対話型アーカイヴの可能性 [報告書]』発行：芸術創造資源のための対話型アーカイヴ構築推進プログラム(慶應義塾大学アート・センター) 平成 22 (2010) 年 3 月 31 日

『土方巽 舞踏譜の舞踏 記号の創造、方法の発見』発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 22 (2010) 年 3 月 31 日

『報告書 舞踏に関する国際的な共同拠点の形成 2009』発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 22 (2010) 年 3 月 31 日

『慶應義塾大学アート・センター ケース教材 4 群馬交響楽団と東京シティ・フィルハーモニック管弦楽団(A)』編集・発行：慶應義塾大学アート・センター、平成 22 (2010) 年 4 月

『アート・アーカイヴ 多面体：その現状と未来 記録集』発行：アート・ドキュメンテーション学会 / 慶應義塾大学アート・センター、平成 22 (2010) 年 9 月 30 日

C-4. 研究会

所員の主催により、各種の研究会が行われている。これはメンバーをある程度固定して行うセミナータイプの研究会から、毎回、発表者を設けてオープンにしている研究会までその形態も様々である。セミナータイプの研究会でもその参加メンバーは所員等の制約はなく、大学内は勿論、一貫教育校や学外にも開かれており、アート・センターの活動に知的な広がりをもたらしている。

開催されている研究会は以下の通り

アート・マネジメント研究会

トランス文化の位相研究会(-平成 19[2007]年度)

感の生成研究会

現代芸術研究会

アーカイヴの思想研究会

9 管理運営・財務

アート・センターの全体組織は、現在は、実質的には恒常的にアート・センターにて職務を遂行する事務担当職員と、専任所員、アーカイヴスタッフ（臨時職員 2 名、委託職員 1 名）によって構成されている。事務職員は専任者 1 名、兼任者 1 名のほか、嘱託職員 2 名で、臨時職員 1 名で日常的な事務のみならず、アート・センターの公開活動においては、受付等さまざまな活動を支えるために常時各職員が前線に繰り出している。

前述したように、現在のアート・センター諸活動のなかでは、ことに重要なポイントのひとつであるアーカイヴ活動（研究・教育・普及の諸側面を兼ね備える）が、そもそも外部資金によって運営が開始されたという経緯をもつことから、今後ともその資金的な状態が活動に大きな影響を与え続けることは否めない。現状では、アート・センターの使命を果たすために、財政上の運営的努力を続けることでアーカイヴ活動資金のやりくりをおこない、かろうじて質の高い活動を遂行し得ているとは言えるだろう。しかしながら、特にアーカイヴ活動では持続性が肝要であり、そのための資金確保は今後も引き続き大きな課題として残されている。特に昨今、アーカイヴに対する内外からの関心の高まりを受けて、これまでアート・センターの積み上げてきた活動の蓄積が、より深く大きな意味をもつという段階を迎えているだけに、これに関する充実した活動を展開していくための資金確保を、ストレスなく達成できるようにすることが重要な課題となるだろう。

なお、アーカイヴ活動以外でも、外部組織との共同事業の形をとって事業を実現させた活動も多い。以下に平成 19（2007）年度以降の外部資金の導入の実績と成果を上げておきたい。

平成 18（2006）-平成 20（2008）年度 文部科学省オープン・リサーチセンター整備事業 慶應義塾大学デジタルアーカイヴ・リサーチセンター（DARC）

平成 18（2006）-平成 22（2010）年度 [共同事業]港区アート・マネジメント講座

平成 20（2008）年度 文化庁委託事業「デジタル・アーカイヴ 慶應義塾の建築」

平成 21（2009）年度 文部科学省 人文学及び社会科学における共同拠点の整備の推進事業 「慶應義塾大学アート・センターにおける共同利用・共同研究の推進」

平成 21（2009）年度 教育研究高度化のための支援体制整備事業 「戦後日本芸術研究の支援体制整備 特殊印刷メディアを中心とした一次資料の整備および公開の促進」

平成 21（2009）年度 東京都文化発信プロジェクト 学生とアーティストによる交流プログラム 「土方

異『病める舞姫』を秋田弁で朗読する」

なおこの他に、研究グループ単位では、港区助成金の獲得や科学研究費による研究の推進も行われている。

付記、まとめに代えて 評価及び将来展望

A. 公開的活動（公演、展示、講座等）

アート・センターでは催事でもある、これら公開性をもつ活動は、開所以来コンスタントに開催されてきたものである。同活動は、基本的には学内の学生・教職員のみならず学外の一般参加者にも広く開かれており、その意味でもアート・センターのこれら活動は、大学と社会とをつなぐ窓口の役割を担っていると考えられる。また逆に、これらの活動においては、公演者や講師が学外から招聘されたり、学外の作品が展示されたりすることもあり、この点では学生にとっては、学内で学外からの刺激を受けることができるという意味からも「窓」としての役割を果たしていると言えよう。それはまた、文化芸術に関する活動であればこそ、という側面をも備えているので、アート・センターならではの特徴とも言うことが出来、ユニークな形で寄与ができていく点が評価されるように思われる。その意味では、平成 18（2006）年から 5 カ年に渡って実践してきた港区との共同事業「アート・マネジメント講座」は、その充実が声高に呼びかけられているところの、地域との連携に貢献するものであった。

これらの活動の内容に関しては、研究的な活動とも密接に関わり、その成果を広く発表する側面をも持っている。特に展示においては、アート・アーカイヴ資料展を毎年開催し、外部にアピールすることが難しいアーカイヴ活動を広く知ってもらう機会としても有効に機能している。更にまた、展示と講座やワークショップを連携させるなど、複合的な催事構成の企画も度々試みられ、単独の開催では得ることのできない立体的な演出が可能であった。また、数年次に渡って連続的に行う企画もあり、深く継続的に理解を深めることができる企画となっていく。このような企画展開は、アート・センターにおける継続的な研究があつてこそはじめて実現し得るものであり、同時に受講者・鑑賞者にとっても、単発の企画よりは深い理解を得やすく、またその機会を提供するという意味をもつものであろう。

これらの公開的活動に関しては、DM、チラシ、ポスターなどの宣伝印刷物を作成・配布すると同時に、ニュースメールやホームページを活用しての広報活動を行っている。また、必ず当日配布の資料（A5 版にフォーマットを統一）を作成し、参加者への資料提供とすると同時に記録化を行っている。

これら公開的活動は、今後も現在のような形で継続して実施していく方針ではあるが、資金的な問題で自主企画での大型の催事が開催出来なくなっている点に大きな問題が生じている。現状では、資金的な裏付けを外部から得た企画以外の開催は、困難である。公開活動は重要な為に、そのような状況にもかかわらず過去にはさまざまな努力によって、何とか企画を行ってきたはいるが、いずれにしても資金的な課題は大きい。これは、元来アーカイヴの運営が基本的に外部資金によってなされる前提から始まったがために、大型の外部資金が望めない場合には様々な工夫によって活動資金を捻出し、アート・センターの主要な活動を支えているためである。

展示に関しては、平成 18（2006）年以降毎年コンスタントに展示会を開催してきたが、平成 23（2011）年 9 月に慶應義塾大学アート・スペースが展示専用施設として開設され、整った環境での展示展開が可

能となった。博物館相当施設の要件である 100 日以上の開催を目途としており、平成 23 (2011) 年度に関しては 9 月以降の 7 ヶ月で達成している。アート・スペースはアート・センター付属施設ではなく、その運営をアート・センターが委託される施設であり、これまで当センターが主催してきた展覧会活動を更に活性化させると同時に、学内の他研究所や研究グループの展示を共催し、展示や付随刊行物の発行などを展覧会開催のノウハウがある立場からサポートすることによって、より充実した展示を可能としている。展示室面積は 45 平方メートルと小規模な施設であるが、展示の際には展示作品等の点検、仮収蔵の場所として展示室の上階にあるアート・センター収蔵庫を利用することができ、準備段階から環境の整った形で展示活動が可能となった。なお、展覧会ごとに学術的な論考や解説が充実した冊子を刊行していることも、大学の付属展示施設に相応しい態度といえよう。展示施設がキャンパス外の公道に面した位置にあることから、学外からの来館者にもアクセスしやすい構造となっているが、現在はまだ認知が行き渡っておらず、より一層の広報につとめる必要を感じている。この展示施設の存在は、大学が設置する博物館学芸員資格の取得課程のために欠くことのできないものであるために、その意味で大学教育における教学上の必要不可欠な施設ともなっているのである。

アート・スペースの運営はまだ端緒についたばかりであると同時に、開設 1 年未滿で施設の環境についてもまだ改善を加えている部分がある。現在の予算範囲で可能な展示を、今後数年実施しながら徐々に実績を積んでいくことが望まれる。

B . 設置科目

アート・センターの設置講座である「アート・アーカイヴ特殊講義」および「アート・アーカイヴ特殊講義演習」においては、アーカイヴに関する理論的な講義および、アート・センターのアーカイヴを教材としての、現場での講義の双方が実践されている。このようなアーカイヴの実践の場での授業実施は、当センターの大きな特色ともなっている。また、アート・センターが提唱してきた戦後芸術に関するアーカイヴの在り方と、それを担う人材の育成という課題がリンクしている点でも、研究と教育との密接な相関が図られ、また、そこに実際の研究資料が関わるといふ、大学教育機関ならではの展開を見せている。

今後も大学院の講義として更なる充実を図ると共に、この講座からアーカイヴ構築の新しい手引きなどが誕生する可能性さえもあるものと想定している。なお、学外からの聴講の希望も寄せられるが、現行の学則では研究所設置科目は在校生以外の受講が不可となっているため、叶わない状況である。この点については、近い将来に見直しがされることを期待したい。

C . 研究的活動 (アーカイヴ活動、刊行等)

アーカイヴ活動は、現在、アート・センターの基幹的な活動となっている。平成 10 (1998) 年に土方巽資料の受入から始まったアーカイヴ構築、資料の研究利用への公開は、13 年に及ぶ活動の中で充実した歩みを重ねるに至った。特にこの 5 年では、土方以外のアーカイヴも公開すると同時、西脇順三郎資料他、いくつかの資料の研究寄託もあり、戦後芸術の研究に関して資料の範囲は広がりを見せ、アーカイヴ活動はいよいよ活性化している。来訪者についても、海外からの研究者も含め、多くの研究者が随時資料研究に訪れている状況にあり、また海外の研究機関等との協力事業も生まれつつある。更にまた、展覧会への資料貸出や、それに伴う研究協力も増加している。これらは、アート・センターのアーカイヴの認知度が高まっていることを示していると同時に、近年アーカイヴそのものが芸術研究の領域において、注目を集めつつあることとも関連していると考えられる。この点に関しては、ここ数年のシンポ

ジウムなどで、アート・センターのアーカイブの紹介や、アーカイブ・スタッフ、所員が招聘される機会が頻繁であることなどからも、その関心の高さがうかがい知れる。このほか、アート・ドキュメンテーション学会を共催した際にアーカイブをテーマとするシンポジウムが開催されたことや、アーカイブ関連の諸企画において寄せられる諸方面からの関心の高さなどにも、当センターのアーカイブに対する注目のほどが示されている。10年余りにわたってアート・センターが積み上げてきたアーカイブ活動の実績が大きく生かされる段階を迎えていると言ってもよいだろう。このような状況を自覚し、大切にしながら、今後も一層の活動の充実を図りたい。

しかしながら、アーカイブ活動は外部資金によって行われてきたため、資金的な基盤がどうしても脆弱であることは否めない。この点は、常に大きな課題である。アーカイブ活動は継続性が非常に重要であり、公開資料をもつ研究所としては、今後、研究利用に関しての後退や停滞は絶対に許されない。更に、上述したように、アート・センターは、日本の戦後芸術資料のアーカイブ活動において、フロント・ランナーとも言うべき立場にあり、我々のアーカイブの成否は今後の日本における戦後芸術研究の進展に関わる問題であるとさえ言い得るだろう。

慶應義塾所蔵の美術品および建築に関わる活動は、「慶應義塾美術品運用委員会」との連携の中で、塾内（一貫校を含む）の作品に関する、保存・修復やケアを確実に実施してきた。創立150年記念展においては、作品状態についてのアドバイスや作品関連資料の提供により協力した。これらの活動を通して、各キャンパスや一貫校で美術品に関する認識が高まり、相談が多く寄せられるようになったことは大きな成果である。

今後もこれまで同様にこの方面の活動を続けて行く予定である。また、建築に関しては、ノグチ・ルーム・アーカイブのランチとして立ち上げた「慶應義塾の建築」プロジェクトにおいて、解体や立て替え中の建築を撮影、記録化してきている。この活動に関連して、近年では日吉寄宿舍の改修プロジェクトにも関わっている。

刊行物に関しては、まず『BOOKLET』『ARTLET』『年報』という定期刊行物において、研究的な論考が多数掲載されている。アーカイブでの日々の研究成果についても論考にまとめられたものもある。また、所蔵作品の調査についても毎年、年報において報告している。更に、これら定期刊行物以外にも資料集や書籍を刊行できたことは、充実した研究活動の表れというべきものである。

なお、展示施設の発足に伴う展覧会ごとの冊子も発行され、刊行物は益々充実した実績を示している。

今後も定期刊行物はこれまで通り発行の予定である。但し、『ARTLET』については今後、必ずしも紙媒体に拘らない展開も視野にいれて発行していくことになるであろう。資料集等についても、研究成果を示す重要な刊行物なので、継続的に制作していきたいと考えているが、これらに関しても経費面での問題が不可避なため、工夫を重ねていくことになる。

研究会は、これもアート・センターの活動の基盤となるべき重要な活動である。したがって、今後も充実させていくと共に、その成果が刊行物や催事企画等に結びついて、成果発表とアート・センターの諸活動が有機的に連動する形で進展させていきたい。研究会を中心とする活動は、アーカイブ活動の進展に伴い新たな活動が発足する予定である。

D. 全体として

アート・センターの活動全体を総体として点検し、評価するならば、過去5年間は以前より活発な活動が展開されてきたと言えよう。各アーカイブの研究者・一般への公開推進、港区との協同による諸事業などによって、アート・センターがジョイントとなって活動が外部へと開かれるのと同時に、逆に外部からの刺激を学内にもたらすという効果呼び込んでいる。とくにそれは、平成23(2011)年度より展示施設の運営を担うことによって、更に大きくなったと言えるだろう。加えて、基盤である研究活動も盛んに行われ、成果発表として充実した企画の実施が繰り返されてきた。何より、当センターがアート・アーカイブとして国内では先駆的な活動を行っていることは確かであり、評価に値するものと思われる。その一方で、課題としてはそのアーカイブ活動を中心とする資金的な問題が大きいというのが現状である。

今後は、現在の活動の活発さや質を保ちつつ、更に向上、発展させるために、日々の研究を充実させると同時に、当センターのより安定した活動を理想に掲げつつ、アーカイブそのものをも危機に陥らせないために、運営の工夫を重ねて行かねばならないであろう。